

隣人呼称語彙

—山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい—

岡野信子

はじめに

対話生活において、呼びかけことばは重要な役割を担っている。人々は、家族にも隣人にも、あるいは初対面の人々に対しても、呼びかけ語で対話の心を訴えかける。対話中にも、たびたび呼びかけことばを用いて、相手の心を対話からそらさせまいとする。

このように用いられる呼びかけ語の一群——呼称語彙——は、生活語彙の重要な一分野である。呼称語彙を、私は、社会生活語彙の一分野と考える。

この稿では、対象地を山口県阿武郡田万川町大字江崎（ヤマグチケン アブゲン タマガワチョー オーアザ エサキ）にとり、視点を隣人呼称語彙にかぎって考察してみたい。

江崎は山口県の北端に位置して、島根県さかいの地である。日本海に面して深く湾入しているこの地は、かつては毛利藩の直轄の港であったと聞く。今日も漁港として栄えており、弁天（ベンテン）や戎（エビス）は漁家集落で、戎に近い本町（ホンマチ）には、商家が軒を連ねている。そして奥の江津（エズ）や須佐地（スサジ）

隣人呼称語彙 —山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい—

は農家集落である。

この江津・戎・本町の三集落で、老年層の男女それぞれ一人ずつから、集落内の全戸の、世帯主と主婦とに対する呼びかけことばを聞いた。両親同居のばあいは、両親への呼びかけことばをも聞いている。未婚者——家の担い手ではない人々——への呼びかけことばは、今回はとりあげていない。

対象をこのように限定しても、呼びかけことばはさまざまに多い。たとえば「ヨイ」や「ナー」のような感声の呼びかけ語もあれば、「コリー（これよ）」と呼びかけることもある。また「アンター」と呼びかけることもさかんである。この稿では、これら以外の呼びかけ語、すなわち、みょうじ苗字（屋号）や名前を呼ぶものと、「ニーサマ（兄様）」「ネーサマ（姉様）」などの親族語で呼ぶものと、そして、「ダンサマ（旦那様）」「オゴーサマ（奥様）」のような尊敬呼称のものとをとりあげている。

なお、三地の教示者は、戎一の男女以外は、いずれも他地にくらしたことのない方々である。戎一では条件に該当する方に出会えず、教示者は、戦時中は、現役召集で北九州の小倉工廠に勤務された方

と、その夫人である。が、調査の過程で、ご両人がよく江崎ことばを保有しておられることを確認している。

農家・漁家・商家の順に、六人の方々の呼称語彙を見ていこう。

一、江津上における隣人呼称語彙

江津上(エズ カミ)は、九戸の農家集落である。ここでは、七十六歳の河内山タカコ(コーチャヤマ タカコ)さんと、六十七歳の村田俊夫(ムラタ トシオ)氏とから伺った。表Iが、ご両人の、集落内の全世帯主と全主婦への呼びかけ語を整理したものである。

まず農女(河内山さん)の呼称語彙を見ると、対男性呼称語彙は、高年者から順に、「ジーサマ」「オジサン」「ニーサマ」である。一方、対女性呼称語彙は、「バーサマ(バーチャン)」「オバサン」「ネーサマ」である。これらは呼びかけの現場では、「ヤマムラノオジサン(山村のおじさん)」のように、「苗字+ノ」を冠して言うことが多い。

隣人への呼びかけに、親族語彙を用いていることに注目させられる。

さて農女が、「ジーサマ」「バーサマ」と呼びかけるのは、八十歳前後の夫妻である。自身とほぼ同年の夫妻には、「オジサン」「オバサン」と呼びかける。また自身より年下の世帯主と主婦とに対しては、すべて「ニーサマ」「ネーサマ」である。未婚の男女に対しては、たとえ相当の年令であっても、「ニーサマ」「ネーサマ」呼称は用いない。

言うまでもなく、「ニーサマ」「ネーサマ」は、本来は兄・姉および年上のいとこを言い、また、これらの人々に呼びかける親族語彙である。これを年下の隣人への呼びかけに転用したものは、「ご主人さん」「奥さん」といった、一種の尊敬呼称である。農女自身、これに敬意のあることをわきまえていて、次のように語る。

ヤッパリ ナマエオ ユーテモ ゴブレー カナート オモーテ
ツイ ナニー ネー。マー ニーサマ ネーサマテ イヤー コ
レガ コノ マーリジャー コレガ イチバン テーネーナ
トバノソジャカラ ネー。

やはり名前を呼んでも失礼かなあと思つて、自然にあれですねえ。まあ「ニーサマ」「ネーサマ」と言えば、これが、このあたりでは、これがいちばん丁寧なことばなのだからねえ。

一方、「ジーサマ」「バーサマ」「オジサン」「オバサン」は、本来は敬意をこめた高年齢者呼称である。ところが農女は、対高年齢者呼称の面のみを強く意識していて、これらよりも「ニーサマ」「ネーサマ」を使おうとする心情を見せる。

ヤッパリ ミタメガ コシデモ、カガミチャー オジサントモ
イヨイケド マダ コシモ、カガマンシ ドンドン スリヤー
ネー。ツイ ヒトガ ニーサマツテ ……。

やはり外見が、腰でもかがめば「おじさん」とも言いやすいけれど、まだ腰もかがまないし、どしどし働いているとねえ。自然に人が「ニーサマ」と呼んで……。

ムコーニモ ネー。マー ドーデモ エカロイケド ネー。マー
「オジサン・ヨイ。」テ ユーヨリヤー ニーサマノ ホーガ

ウケガ エーヨーナ キガ シマス。

先方でもねえ。まあ、どうでもいいたろうけどねえ。まあ、「おじさん、よい。」と言うよりは、「ニーサマ」のほうが、受けがよいような気がします。

自身もかなりの年齢の農女のこのようなわきまえは、たしかに一面の理である。が、じつは呼称には、固定の一面がある。先方が年を重ねていくのにあわせて呼称を変えることは、通常、しないのが呼称慣習である。

農女は、中村家の老女を、ばあいによつては「オバサン」と呼ぶが、つねは「ナカムラサン」と呼ぶ。この老女とは小学校と一緒に通った仲で、そのころからずっと「ナカムラサン」と呼んでいるのだと言う。呼称固定の慣習が、ここによく見られる。

農女はまた、数年前に嫁してきた山村家の若い主婦には、まれに苗字で呼びかけることがあるという。集落内の新人にふさわしい新呼称を用いようとする心情が、無意識の中に働いているのである。か。

つぎに農男の呼称語彙を見よう。農男は、男性に対しては、相手は自分より高齢ならば、「ジーサマ」「オジサン」と呼んでいて、これは農女と同じである。つぎの年層の六十代・五十代の男性に対しては、苗字に「サン」を添えて呼びかける。そして四十代以下の男性には名前に「サン(様)」「サー(様)」、または「ニー(兄)」「ポー(坊)」を添えて呼びかけている。

すなわち、農男の対男性呼称には、親族呼称と苗字呼称と名前呼称とがあつて、年層によつてその使用が区別されている。これらの

隣人呼称語彙 — 山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい—

呼称語彙は、「ジーサマ」「オジサン」は尊敬心情をこめて用いられ、苗字呼称は対等意識で用いられている。親愛の情をこめた名前呼称は、相手が幼かったころから、呼びならわしているものである。その接辞の「サン」・「サー」・「ポー」は、これもその個人に対して、集落内で呼びならわしてきたものであるが、「サン」は共通語的で、いくらかあらたまつてもいる。また「ニー(兄)」は、「ニーサマ」が接尾辞化したもので、これはきわめて親しい相手への呼びかけらしい。農男は、自身が仲人役をつとめた人にだけ、「カーニ—」と呼びかけている。

ところで農男は、冠婚葬祭の場席では、日ごろ名前で呼んでいる若い世帯主たちをも、苗字で呼ぶという。共通語社会から受容した——小学校の教室や軍隊で身につけた——苗字呼称を、公称であり、よい呼びかたであるとする意識が働いているのであろう。もつとも、「ジーサマ」「オジサン」呼称は、晴れの場席や公的場面でも変えない。あらわに苗字を言うよりは、親族呼称で呼ぶほうが、敬意が高いからである。

一方、対女性呼称は、その年齢に応じて、「バ—サマ」「オバサン」「ネ—サマ」「ネ—サン」と、親族呼称で一貫している。「ネ—サマ」と「ネ—サン」とは、語末音のわずかな差異であるが、農男は、五十代の女性には「ネ—サマ」、四十代以下の女性には「ネ—サン」と使い分けている。

以上が江津上における農女・農男の隣人呼称語彙のおおよそである。農女の隣人呼称語彙が、親族呼称で一貫しているのに対して、農男は、対男性呼称語彙で多様さを見せる。かつ、日常場面と公的

場面としては、その対男性呼称語彙に変化が見られる。この現象は、あくまで一個人の男女の呼称語彙における相違ではあるが、呼称語彙の共通語化が、男性の、しかも公的場面からおこなわれつつあると一般化して言うことができそうである。

二、戎一西の浴における隣人呼称語彙

戎一西の浴(エビス イチ ニシノエキ)は、十八世帯の漁家集落である。このうち二世帯は独身者であるので、ここには取りあげない。戎一西の浴では、山本新松(ヤマモト シンマツ)(六十八歳)、山本茂子(ヤマモト シゲコ)(六十六歳)のご夫妻に何った。茂子さんは、戎の町家から漁家に嫁がれた方である。以下の記述では、新松氏を漁男、茂子氏を漁女とする。

表Ⅱで、まず漁女の対男性呼称語彙を見ると、七十歳を超えている叶氏を、「オジサン」と呼んでいる。六十歳代、および六十歳に近い江川・玉川・西谷・新岡の諸氏に対しては、「ニーサマ」と呼ぶ。ただし、その人々と同年輩であっても、尼崎氏にだけは「アマダキサン」と、苗字に「サン」を添えて呼びかけている。尼崎家は、数軒離れていて、さきの人々ほどには親しくないからだと言う。

次の年層、すなわち五十代とそれに近い年齢の、上浜兄弟・岸根・大村義雄の諸氏には、「カツニーサン」「トラニーサン」「シヨニーサン」「ヨニーサン」と、名前に「ニーサン」を添えて呼んでいる。そして四十代の滯氏と大村忠氏と、三十代の上浜明弘

氏とへの呼びかけは、「ヤツチャン」「タダシサン」「アキチャン」のように、「名前+サン・チャン」である。この、「名前+サン・チャン」で呼びかける人々について、漁女は、「わが子と年が近い。」とか、「子供のころからこう呼んでいる。」などと説明した。このことばは、名前での呼びかけが親愛呼称であり、かつ、呼称固定の慣習によるものであることを語っている。

漁女はまた、六十歳ぐらいの三浦氏をも「キンチャン」と呼ぶ。他の人々とのつりあいからは、「ニーサマ」と呼ぶべき人である。このように呼びかける事情を、漁女は、「子供の時から呼び慣れていて変えられない。」と説明する。また「戎一の内、この人をキンチャンと呼ぶ人は二十人ぐらいいるだろう。」とも言う。三浦氏にかぎって、六十歳の今日も幼名で呼ばれる理由は明らかでない。あるいは、三浦氏が幼少期から集落の人気者で、その幼いころの呼び名が、長く人々に親しまれて来たのかもしれない。あるいはまた、五・六十年も前は、「くチャン」の呼びかけが、「くヤン」や「くサー」よりは、耳新しいものであったか。その「チャン」を添えた「キンチャン」という呼称詞を、人々は珍重しつづけてきたのかもしれない。いずれにせよ、呼称固定の慣習が、「年層に応じた呼称」の原則を越えて働いているわけである。

以上のように、漁女の対男性呼称語彙の内は、親族語呼称と苗字呼称と名前呼称との三種である。これは、さきの農男の対男性呼称語彙と等しい。漁女はこれらの呼びかけ語を、相手の年層に応じ、また相手との親疎関係によって、あるいは呼称固定の慣習に従って、微妙に使いわけている。

つぎに漁女の対女性呼称語彙を見ると、老男への呼びかけの「オジサン」に相当する「オバサン」はない。これはその年齢の女性がいないためである。六十代の河野さん・叶さん・江川さんに対しては、「ネーサマ」と呼びかけている。その人々に続く五十代の三浦さん・尼崎さん・新岡さん・玉川さん・西谷さんには、「苗字+サン」で呼びかける。四十代・三十代の女性に対しては、名前に「サン」「チャン」を添えて呼んでいる。さきの江津上の農女は、名前で呼びかけることを、「ご無礼なような」と避けていたが、漁女は土地つ子の主婦にも他地から嫁いできた主婦にも、ひとしく名前前で呼びかけている。

漁女の対女性呼称語彙は、親族語転用の呼称と苗字呼称と名前呼称とからなる点では、対男性呼称語彙と同じである。ただし、その使用状況を比較すると、男性に対して苗字で呼びかけるのは、六十代の一人にかぎってであるが、女性に対しては、五十代のすべての女性に苗字で呼びかけている。五十代の男性を呼ぶ「だれそれニーサン」と同じ形式の「だれそれネーサン」式の言いかたもなくはないが、めったに言わないということであった。漁女のばあい、共通語式の苗字呼称は、むしろ対女性のばあいにさかんに用いられている。

つづいて漁男の呼称語彙を見よう。対男性呼称語彙はほぼその年層順に、

苗字+サン → 苗字+文末詞「ニ」 → 苗字+ニー(兄) → 名+ニーサン(兄さん) → 名+ニー → 名+サン・チャン・ヤン

隣人呼称語彙 — 山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい —

である。

漁男の対男性呼称語彙には、「ジーサマ」「オジサン」がない。これは自身の年齢を基準にした時、そう呼ぶにふさわしい老年者がいないためである。もし八十歳にもなる男性がいれば、「オヤジサン」か「ジーサン」と呼ぶということであった。表Ⅱに見えているように、漁男の呼びかけ語は、おおむね六十歳以上は苗字、五十代以下は名前と大別されるが、例外もあり、また苗字呼称にも名前呼称にも、接尾辞に微妙な差違がある。

まず苗字呼称を見ると、叶・西谷・新岡の三氏には、苗字に接尾辞「サン」を添えて呼びかけるが、江川氏には「エガワニー(兄)」と呼びかけ、尼崎氏への呼びかけは「アマダキ ニ」である。漁男は「エガワニー」の呼びかけについて、江川氏は小学校が一級上で、今も親しいからであると説明する。また「アマダキ ニ」と呼びかけるのは、「アマダキサン」と呼ぶほどではないが、名前で呼んで軽すぎるといった間がらだからと察せられる。

※ 「アマダキ ニ」の呼びかけは、センチンスと判断されるから、厳密には、この稿に取り上げるべきではあるまい。が、尼崎氏への呼びかけとして漁男の指示した唯一のものであるので、ひとまずここにあげておく。「ニ」は文末詞と認められる。山口県では、「アナタニヤ オイデマシタカ。」(あなたはいらっしやいましたか。)¹のように、格助詞「ニ」が、敬意表現に用いられることが多い。呼びかけの文末詞「ニ」の出自は、これである。

つぎに名前呼称の内を見ると、五十代の人々には、「カツオニー」「トラニー」のように、名前に「ニー(兄)」を添えて呼んでいる。この人々よりわずかながら若い大村氏を「ヨニーサン」と「サン」

づけて呼ぶのは、いくらか遠慮のある仲であるためらしい。一方、岸根氏は五十歳であるが、親戚筋の人であるから、「シヨイヤン」と名前前で呼んでいる。四十代、三十代の人々を「ターサン」「ヤツチャン」「アキチャン」と幼いころのままに呼んでいるのは、漁女のばあいと同様である。そして六十代の三浦さんを「キンチャン」と呼ぶこともまた、漁女と等しい。

このように、呼称語彙の使用は、漁男においても、相手の年齢に応じるほかに、相手との心的距離を映し、あるいは呼称固定の慣習に従うなどのことがあって、単純でない。一方、晴れの場や公けの場では、その呼びかけが、「苗字+サン」に単純化されることは、農男のばあいと同様である。

ところで漁男の山本氏は、集落内の人々から、苗字の一字と名前の一字とを合わせて、「ヤマシン（山新）」と呼びかけられたり、持ち船の名で「シンマル ヨイ（新丸よい）」と呼ばれたりするといふ。が、山本氏は他の人々をこのようには呼ばない。山本氏は、これを、自分以外の人のばあいは、苗字と名とを組み合わせても口調がよくないからだと説明する。船名などで呼ぶことのないのは、あるいは山本氏の呼称習慣かもしれない。

さて漁女の女性への呼びかけは、ほぼ五十歳あたりを境にして、上を「ネーサマ」「ネーサン」[※]と呼び、下を「名前+サン・サー・チャン」で呼んでいる。もっとも年齢の境は厳密ではなくて、たとえば玉川さんは五十歳を過ぎて「ソノサー」と呼ぶ。親戚関係の人だからである。また大村さんは四十歳代であるが、「ネーサン」と呼んでいる。名前前で呼ぶことを遠慮する何等かの心的距離が

あるのだろう。その主人に対しても、「ヨニーサン」と呼んで、他の人々への呼びかけとはやや異なっていた。

※ ときに「ネーサン」とも言うが、「ネーサン」と言うことが多い。

漁男が女性に苗字で呼びかけることもあるのは、河野さんに対してだけである。夫に先立たれた河野さんは、その集落内では、一家のあるじの役割を、男性同様に担っているからであろう。

ともあれ漁男は、対男性呼称語彙では「ニーサマ」を失っているのに、対女性呼称語彙では、「ネーサマ」「ネトサン」をよく残している。これは農男においても同様であった。

三、本町における隣人呼称語彙

本町は十八戸の町である。多くは商家であるが、寺院もあり、また最近まで医院（現在は閉院）もあった。この十八戸の中の、十戸は他地から転入して来た家である。この町では、八十三歳の山根チヨ（ヤマネ チヨ）さんと、七十九歳の室谷雄雄（ムロタニ ツチオ）氏に伺った。別表Ⅱが、ご両人の隣人呼称語彙を整理したものである。

商女（山根さん）の対男性呼称語彙は、「ゴインゲサマ（ご院家）」「ダンサマ（旦那様）」「タイシヨ（大将）」の一群と、「オジチャン」「オトチャン」「オイサン」「ニーサマ」の一群と、そして苗字呼称とである。これらのうちで、「ゴインゲサマ」は、真宗の住職に呼びかける、いわば職業尊称である。また「ダンサマ」は、大きな商家の主人や、医師など、大家の主人への呼びかけ

語である。身分呼称と言うべきであろうか。「タイシヨ」は、商家の主人を呼ぶ軽い敬称である。これらは年齢にはかかわりなく用いられている。

さて親族語を転用した「オイサン」は、自身と年齢の近い室谷氏への呼びかけである。この家と商女の家とは親交がある。また「ニーサマ」は、親戚筋の岡田氏・両中本氏への呼びかけである。商女の隠居後に江崎に転入した竹中氏と石川氏へは、「タケナカサン」「イシカワサン」と、苗字で呼びかける。呼びかけることもまれなくらいのつきあいであるから、「ニーサマ」とは呼ばないと言う。

商女は、「あの家のご主人さんなど知らないねえ。」ということをも、「ニーサマヤナンカ シラン ネー。」と語った。このように商女は、「ニーサマ」を「ご主人さん」の意味の一般名詞としては広く用いながら、呼称詞としては、呼びかける範囲を限っている。限ったというよりは、むしろ本来的に用いようとしつつあると言わべきであろうか。

親族語を転用したと見えるものには、ほかに「オジチャン」と「オトチャン」とがある。が、この二語は、さきの「オイサン」や「ニーサマ」とは、その使用心情が異なっている。「オジチャン」は、十二歳も年下の佐々木氏への呼びかけであるが、これは佐々木家のお孫さんの呼びかけにならったものだという。また室谷氏を「オトチャン」とも呼ぶのは、これも室谷家の家庭内呼称にならったものである。その家の家庭内呼称にならうのは、商女が両家と親しいためである。

さて商女の対女性呼称語彙は、「オゴサマ」「オクサマ」「オ

クサン」と、「ネーサマ」と、「オバーチャン」とである。これらの中で、「オゴサマ」と「オクサマ」とは、大家の主婦への呼びかけで、男性を呼ぶ「ダンサマ」と対応する。「オゴサマ」は、「オクサマ」よりは古い呼称詞で、「オゴサマ」と呼びかけられていた人々は、すでに死去している。

ところで「オクサン」は、「オクサマ」とは語末音がわずかに異なるだけであるが、身分呼称的には用いられていない。また年層にも無関係で、「ネーサマ」と呼ぶほどに親しくない主婦が「オクサン」である。共通語的な用法と言えようか。「ネーサマ」は、親戚の主婦、ならびに親交のある主婦への呼びかけである。また二十歳近くも若い佐々木家の主婦を、「オバーチャン」と呼ぶのは、佐々木家内の呼称に従ったものである。

商女の隣人呼称語彙は、おおよそ身分呼称語彙と親族呼称語彙との二類と見える。が、「オジチャン」「オトチャン」「オバーチャン」は、従来の親族語呼称とは、発想の異なるものである。また「オクサン」も「オクサマ」とは違って、多分に共通語的に用いられている。男性二名への苗字呼称も聞かれた。

商女は調査者の中ではもともと高年でありながら、農女や漁女に見られなかった新しい呼称傾向も見せている。

一方、商男の男性への呼びかけは、特定の人に「ゴインゲサマ」「センセー(先生)」「ダンサマ」「タイシヨ」と呼びかけるほかは、すべて苗字呼称である。これらの中で、「ダンサマ」と呼ばれているのは、故人である。商男は、「ダンサマ」と呼ぶことは、それらの人々とともになくなった、その後は、どんな大家の人にも

「ダンサマ」と呼びかけることはしない、と語る。商家の男性に呼びかける「タイショー」は、一種の職業呼称と言えようか。軽い敬意がある。「ゴインゲサマ」「センセー」、そして「タイショー」などと、職業敬称での呼びかけは、今日もさかんである。

商男は、女性へは、およそ六十歳以上の人々には「オクサン」と呼びかけ、それより若い人々には苗字で呼びかける。「オクサン」呼びは、苗字呼びよりいくらか敬意が高い。商男も近年は家にひきこもっているもので、若い人々に呼びかけることはまずないということであった。山根チヨさん、すなわち商女を「パーチャン」と呼ぶのは、山根家内の呼びかたにならったもので、両家は古くから親しい。

商男は、男性にも女性にも、親族語で呼びかけることがない。以前は「ニーサマ」「ネーサマ」と言ったが、今はまったく口にしないということであった。

男性には職業敬称か苗字で呼びかけ、女性には「オクサン」か苗字かで呼びかける呼称語彙体系は、共通語の呼称語彙体系とほぼ同じと言えよう。

四、農・漁・商の男女の隣人呼称語彙の比較

江崎町の農家・漁家・商家の男女それぞれ一人の呼称語彙を、呼びかけられる人の男女別に整理し直したものが、表Ⅳと表Ⅴである。

六者の呼称語彙の比較を試みるさいに、商家の男女の、「ゴインゲサマ」「センセー」「ダンサマ」「タイショー」「オゴーサマ」

「オクサマ」は、ひとまず除いておきたい。農家集落や漁家集落にも、そのような職業の人、あるいは大地主といった類の人が存在するならば、このような呼称語彙の用いられることが予想されるからである。すなわち、この類の呼称語彙の有無は、その集落の構成メンバー如何にかかわることである。比較の場ではこれらを除くことが妥当であろう。

右の類を除いて六者の呼称語彙を見ると、親族語彙で呼びかけることが、農家・漁家・商家の順に少なくなっている。それは、被呼称者を、まさに親族語で呼ばれるにふさわしい者に限定していくことでもある。女性のばあいを見ると、農女は集落内のすべての人々に親族語で呼びかけるが、漁女はその範囲をかなり狭ばめている。商女になると、親族語で呼ぶのは、親戚か、あるいはそれに近い交わりの人だけになる。

商家の町には、他地からの転入者も多く、代々親しんできた家々とは、まじわりの程度の異なることも多い。このような交際状況が、隣人への呼びかけに親族語を用いることを衰えさせる大きな要因となつていよう。

男性のばあいは、女性への呼びかけでは、農男は親族語のみであり、漁男もまた、多くの女性に「ネーサマ」「ネーサン」と呼びかける。が、商男は「ネーサマ」「ネーサン」と呼びかけることがまじつたくない。一方、男性に対しては農男・漁男・商男ともに「ニーサマ」と呼びかけることはない。

男性は、まず、あらたまった場席、公的な場席で、つづいて日常場面においても、しだいに「ニーサマ」呼称を捨てていったと思わ

れる。

「ニーサマ」の類の「ニーサン」を、接尾辞として用いているのは、漁女である。漁男は「〜ニー」をよく言う。商家でも、以前は「〜ニー」「〜ネー（姉）」と言ったが、こちらは低い品位のものであったため、早く衰退してしまった。

「ニーサマ」呼称と交替したのは、苗字呼称である。さきにも述べたように、学校教育や軍隊教育の場で、男性は、苗字での呼びかけを、正式なもの、公的なものとして、身につけていったと思われる。ただし、苗字呼びは対等の者への呼びかけであるから、年長者への「ジーサマ」や「オジサン」は、比較的長く残っている。また公的場席に出ることの少なかった——戦前はまったくなかった——女性に対しては、苗字呼称は用いられにくい。漁家の男性の特殊な一使用例を除いては、商家の男性にもわずかな例が見えているばかりである。

女性が女性に苗字で呼びかけることは、農女にも商女にも見られない（農女に、特殊の一例はある）。そのような状況の中で、漁女は何人もの女性に苗字で呼びかけている。漁女は三女の中ではもっとも若いので、単純な比較は慎まねばならないが、ここには、漁家の女性の闊達な気質といったものが感じられる。そのような気質を育てる漁家生活があったのであろう。

対男性の苗字呼称に相当するのは、対女性の「奥さん」呼称である。共通語風に「オクサン」を言うのは商男で、商女にもいくらから見えている。農家・漁家では、「オクサン」はまだ口にされない。

（漁女は、町家の女性に向けては、「オクサン」と呼びかけると言

隣人呼称語彙 — 山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい—

う。）

漁女と漁男とは、若い隣人を名前と呼ぶ点で、特色を見せる（農男も若い男性には言う）。これは、幼少期の呼びかけ語を、成人後もひき続いて用いているのであるが、ここにも漁家の開放的な生活心情がうかがえる。

同じく江崎の内にあっても、六者の呼称語彙は、このようにかなり異なっている。これを、生活の異なる三集落の呼称語彙差であり、男性と女性との差違である、と、一般化して考えても、さして不当ではあるまい。

五、親族語彙の、隣人呼称語彙への転用について

隣人呼称語彙の中に、「ジーサマ」「バーサマ」「オジサン」「オバサン」「ニーサマ」「ネーサマ」の親族語彙があることには、特に注目させられる。

かつて通婚圏の狭がった時代には、小地域社会内には、親戚関係を持つ家々が多かった。このような状態を、江崎の人々は「ヒッパリガ、オイキー（縁続きの家が多いから）」と語っている。隣人に親戚縁者の多い社会では、その人々を「オジサン」「オバサン」、あるいは「ニーサマ」「ネーサマ」などと呼ぶことは、ごく自然なことであつただろう。また親戚でなくとも、代々その集落で生活とともにした家々の人の間にも、自然に親族語で呼びかけたくなるような心情が湧いたに違いない。

やがて親族語をもって呼びかけることが、慣習化し、かつ半ば形

式化してくると、親族的な心情の有無にかかわらず、おしなべて親族語で呼びかけるようになる。農女の呼称語彙が、その状況をよく見せている。

このような呼称生活の中に、共通語社会から、苗字呼称や「奥さん」呼称が、新しい呼びかたとして入ってくる。また一方には、集落内の隣人層も複雑になり、人々の隣人意識にも変化がおこる。それらのことは、当然、親族語で隣人に呼びかける呼称慣習にも影響を与える。三集落の男女の呼称語彙の使用状況に、そのことは明らかである。

なお、「ジーサマ」と「オジサン」と「ニーサマ」、また「バーサマ」と「オバサン」と「ネーサマ」の二系列は、いずれも親族語彙として一線上に並ぶものではない。ところが隣人呼称語彙としては、それぞれ、年層による縦の直線系列をなしている。

おわりに

小地域社会の中においても、生活状況の異なるいくつかの集落があれば、その言語生活にもならかの差違が見える。

隣人呼称語彙のばあい、江崎の農家・漁家・商家の人々の間には、ここに述べたような差違が見られた。隣人呼称としての親族語の盛衰が、そのおもな差違をなしている。

「ジーサマ」や「バーサマ」、「ニーサマ」や「ネーサマ」の類での隣人への呼びかけは、山口県にかぎらず、日本語方言社会に広くおこなわれてきたものであろう。今日のそのおこなわれようを、広

くたずねてみたい。それは、集落構造やそこに生きる人々の隣人認識の推移を、どのように写しているであろうか。

ご教示いただいた方々は申すまでもなく、江崎の多くの方々にお世話になりました。ことに山根幸子さんの厚いお世話をいただきました。心から感謝申しあげます。

隣人呼称語彙の考察のためには、やむをえず個人間の親疎にふれることもありました。その方々を傷つけることのないよう、心して筆を運んだつもりですが、思わぬ非礼をおかしてはいないかと恐れます。ご寛恕をお願い申し上げます。

表I 江津上の隣人呼称語彙

呼ぶ人		世帯主	年令	世帯主の妻	年令	教示者の説明	世帯主の父	年令	世帯主の母	年令	教示者の説明
農男	農女	ヨコタサン	51	ネーサマ	46						
農男	農女	ニーサマ	60ぐらい	ネーサマ	57ぐらい	(女) 孫がいるので、はあいによつては、オジサン・オバサンとも呼ぶ。が、こう呼ぶと、なにか年寄りあつかいをするようである。			パーチャマ	81ぐらい	寝たり起きたりの日々を過している。
農男	農女	ゴウチヤマサン	60すぎ	ネーサマ	58				パーサマ	76	
農男	農女	ニーサマ	67	ネーサマ	58ぐらい	(女) 孫がいるが、まだオジサン・オバサンとは言いにくい。					
農男	農女	オジサン	76歳	オバサン	70歳	(女) 夫婦で三十頭あまりの牛を育てている。 (男) 遠い親戚である。					

隣人呼称語彙 — 山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい—

隣人呼称語彙 — 山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい —

漁男		漁女		新		岡		西		谷		玉		川		江		川		叶	
ニ	オカ	ニ	サ	ニシ	タニ	ニシ	タニ	サ	ブ	ニ	サ	エ	ガ	ニ	サ	カ	ノ	オ	ジ		
サン	サン	マ	マ	ニ	ニ	ニ	ニ	サン	サン	マ	マ	ニ	ニ	マ	マ	サン	サン	サン	サン		
60ぐらい		60ぐらい		60ぐらい		60ぐらい		61		61		68		68		71歳		71歳		71歳	
				職業は石工である。								同級生だからこう呼ぶ。 他の人はエガワサンという。	主人の友人。								
ネ	サ	ニ	オカ	ネ	サ	ニ	シ	マ	ガ	タ	マ	ネ	サ	ネ	サ	ネ	サ	ネ	サ		
マ	マ	サン	サン	マ	サン	ニ	タ	ン	ワ	ガ	ワ	マ	マ	マ	マ	マ	サン	マ	マ		
56		56		52		52		56		56		63		63		65歳		65歳		65歳	
親	戚	自分が他地に出ている間に嫁いできた。				自分が他地に出ている間に嫁入ってきた。 須佐の人。				この人の実家の親といとこである。	自分の小倉在任の間に江崎の弁天から嫁してきた。	親	戚	自分よりも一年早く島根県から嫁した。							

漁男	漁女	漁男	漁女	漁男	漁女	漁男	漁女	漁男	漁女	呼ぶ人
シヨイヤン	シヨニーサン	トラニー	トラニーサン	カツオニー	カツニーサン	キンチャン	キンチャン	アマダキニ	アマダキサ	世帯主
50		52ぐらい		55ぐらい		60ぐらい		59か60ぐらい		年令
名は庄助。自分(山本)と、この人の親とがいとこ。						子供のころの呼称で今も呼ぶ。				教示者の説明
フミサン	フミチャン	アサヨサン	アサヨサン	シツチャン	シツチャン	ネーサン	ミウラサン	ネーサン	アマダキカメザン	世帯主の妻
48		50ぐらい		52		57		57歳		年令
阿武郡内から嫁いできた。		島根県の浜田から嫁いできた。		トコロノヒト(土地っ子)である。		自分の小倉在任の間に他地から嫁いだ。		他地から嫁いできた人。幼少期を知らない。		教示者の説明

隣人呼称語彙 — 山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあい —

漁男		漁女		河		野		上		大		港		大	
				ア キ チ ヤン	ア キ チ ヤン			タ ノ サ ン	タ ダ シ サ ン	ヤ ツ チ ヤン	ヤ ツ チ ヤン	ヨ ノ ニ ノ サ ン	ヨ ノ ニ ノ サ ン		
亡				35				40ぐらい		45ぐらい		47~48 ぐらい			
もとと大工であつた。 のちに漁業にかわる。				子供のころの呼称で今も呼ぶ。		我が子とほぼ同年。		我が子とほぼ同年。 子供がすぐ前である。 子供のころの呼称で今も呼ぶ。		子供とほぼ同年。		ヨ ノ ニ と呼ぶ人もある。			
ネ ノ サ マ	カ ワ ノ サ ン	ネ ノ サ マ		ネ ノ サ ン	チ ノ チ ヤン	ヨ ツ チ ヤン	ヨ ツ チ ヤン	ト ミ チ ヤン	ト ミ チ ヤン	ネ ノ サ ン	サ ツ チ ヤン				
67				34		37		45		42歳					
尾浦(もと須佐町、現在は田万川町)から嫁いできた。				名前をはっきり知らない。 我が子と同年である。 浜田から嫁いできた。		トコロノヒト(土地っ子)である。 我が子と友人である。		同町から嫁入り。		島根県の人。					

表Ⅲ 本町の隣人呼称語彙

呼ぶ人		世帯主		年令		教示者の説明		世帯主の妻		年令		教示者の説明	
商男	商女	タイシヨ	タイシヨ	65		中 (もと 材木店)		オクサン	オクサン	亡			先代の妻にはオゴ サマと呼びかけていた。
商男	商女	ダンサマ	ダンサマ	亡		内 (船問屋・漢方薬店) 現在はいない。		オクサン	オゴ サマ	亡			
商男	商女	センセ	ダンサマ	亡		野 (もと 病院)	先代をダンサマと呼んだ。 お医者さんだからこう呼ぶ。	オクサン	オクサマ				先代の妻はオゴ サマと呼んだ。
商男	商女	ダンサマ	ダンサマ	亡		谷 (もと 酒造業)	良い家の主人だからこう呼ぶ。	オクサン	オクサマ	86			
商男	商女	ゴインゲサマ	ゴインゲサマ	72歳		阿部 (教 専 寺)	お寺の坊さんだからこう呼ぶ。	オクサン	オクサマ	65歳			

隣人呼称語彙 ー山口県阿武郡田万川町大字江崎の農家・漁家・商家の老年者のばあいー

商男		商女		中		商男		商女		中		商男		商女		中		商男		商女		中		商男		商女		中																					
タケ	ナカ	ナカ	サン	タケ	ナカ	サン	ナカ	モト	サン	セツ	ニー	サマ	ナカ	モト	サン	セツ	ニー	サマ	オカ	ダ	サン	ニー	サマ			オ	イ	サン	オ	ジー	チャン	サ	サ	キ	サン	オ	ジー	チャン											
76				62				70				77				79				71歳				71歳																									
二十年前に転入。				中 (もと 材木業)				甥に当る。				本 (薬 局)				母どうしが親しかった。オトイチャンは、その家庭内の呼称をまねたもの。				谷 (煮干し製造業)				十五年前に益田市より転入。				孫さんの呼びかたにならったもの。				孫さんの呼びかたにならったもの。																	
タ	ケ	ナ	カ	サ	ン	オ	ク	サ	ン	ネ	ー	サ	マ	オ	ク	サ	ン	ネ	ー	サ	マ	オ	ク	サ	マ	ネ	ー	サ	マ	オ	ク	サ	ン	オ	バ	ー	チ	ヤ	ン	オ	ク	サ	ン	オ	バ	ー	チ	ヤ	ン
72				58				66				71				69				65歳				65歳																									
												今は親戚関係になつてゐる。それ以前から ニーサマ・ネーサマと言つていた。(転入)												孫さんの呼びかたにならったもの。																									

商男	商女	呼ぶ人
ナカノサン		世帯主
54		年令
両中野家は兄弟である。	最近の家。話すことがない。	教示者の説明
42		世帯主の妻
		年令
		教示者の説明
ナカノサン		世帯主
58		年令
転入。	最近の家。話すことがない。	教示者の説明
52		世帯主の妻
		年令
		教示者の説明
イシカワサン	イシカワサン	世帯主
48		年令
転入。		教示者の説明
46	オクサン	世帯主の妻
		年令
		教示者の説明
タニオカサン		世帯主
38		年令
転入。	三、四年前に移って来た家。呼びかけることがない。	教示者の説明
33	タニオカサン	世帯主の妻
		年令
		教示者の説明
ダンサマ	ダンサマ	世帯主
亡		年令
		教示者の説明
		世帯主の妻
		年令
		教示者の説明

表V 対女性呼称語彙

商 男 77	漁 男 68	農 男 67	商 女 83	漁 女 66	農 女 76歳
パー チ ヤ ン		パー サ マ	オ バ ー チ ヤ ン	オ ゴ ー サ マ	バ ー サ マ (バ ー チ ヤ ン)
		オ バ サ ン			オ バ サ ン
オ ク サ ン	ネ ー サ マ・ネ ー サ ン	ネ ー サ マ・ネ ー サ ン	ネ ー サ マ	ネ ー サ マ	ネ ー サ マ
苗 字 十 サ ン	苗 字 十 サ ン	苗 字 十 サ ン	オ ク サ ン	苗 字 十 サ ン	名 十 サ ン・チ ヤ ン